

## 「高齢者就業の経済学」

清家篤・山田篤裕(著)

日本経済新聞社 2004年10月20日刊

1990年以後の労働経済学の中心的課題は中高年労働者のリストラから高齢者と若年者の就業問題に移ってきた。高齢者問題について積極的に発言し、研究してきた著者達の論点を包括的にまとめ上げたのが本書である。高齢者就業に関する主要な論点が丁寧に論じられており、この問題に関するものとしては最新かつ最良の内容であるといえる。

著者達の提言は次のようにまとめることができる。(1) 高齢者が望むならば生涯現役であることが可能となるような社会を実現すること。(2) 現行の年金制度が高齢者の引退促進的であるという点を解決すべきである。(3) 雇用において年齢制限を課さないこと。(4) 終身雇用の時代ではないのだから、個人の選択で人的資本投資を継続的に行う必要があること。(5) 女性の単身高齢者を中心とした低所得層に対する所得再分配政策が必要である。

これらの問題に早急に取り組み、真に豊かな「超」高齢社会を実現すべきであるというのが著者達の提言である。以下では、今後の著者達の研究への期待も込めて幾つかの問題点について述べておきたい。

第一に、高齢者の雇用と若年者の雇用には負の相関はないという主張は、どこまで通用する議論なのだろうか。生産性の高い高齢者と経験のない若年者を比べれば、雇用対象も違うので競合しないかもしれないが、元気だがそれほど生産的でない高齢者と平均的な若者のどちらを採用するかということになると企業だけの判断にまかせていいのだろうか。

第二に、生涯受け取り年金総額一定となるのが望ましいと著者達は主張するが、寿命の不確実性に伴う保険としての年金の側面はどのように担保すればいいのだろうか。

最後に、高齢者が65才から寿命までの期間を比較的豊に過ごすためにはどの程度の資金が必要なのだろうか。それを確保するために、年金、賃金所得、貯蓄あるいは蓄積した資産の取り崩しといった3つの資金源をいかに組み合わせるかということが豊かな高齢社会のデザインには欠かすことのできない論点ではないだろうか。